

もくじ

▽学会誌編集委員会便り	1
▽国際会議のお知らせ	1
▽在外満喫	2
▽研究部会レポート	3
▽書評	4
▽ from Editors	5

【学会誌編集委員会便り】

英文誌の Open Access Journal への移行

英文誌編集委員長

安河内 朗(九州大学)

第 30 巻を迎えた日本生理人類学会英文誌 (Journal of PHYSIOLOGICAL ANTHROPOLOGY) は、いよいよ来年 2012 年 1 月から Open Access Journal として新たなスタートを切ることになりました。発信元はロンドンに拠点を持つ Springer 社の BioMed Central (BMC) であり、これを機に BMC の電子投稿システムによる Peer Review も始まります。そして 2012 年より冊子体はなくなり、電子データ情報になります。この Open Access 化は今後ますます増える傾向にあり、現在すでに Peer Review 雑誌のうち 8.5% が full open access となっています。

ここで何故、BMC の Open Access にしたのか、簡単にご説明します。現在でもすでに JST による Open Access を実施していますが、BMC はこの業界の最大手であり、自らのブランド力を活かした絶大な広報力を持っているからです。その分、私たちの論文が世界中の多くの人々の目に触れるチャンスが広がることになります。このことは、JPA が 2013 年により高い Impact Factor (IF) を獲得するための絶好の機会になります。なぜなら 2012 年の 1 年間に JPA に掲載された過去 2 年間の論文がどの程度引用されるかで IF が決まるので、JPA の visibility が世界的に広がることは願ってもない機会になるからです。BMC は戦略的な広報のために自社の marketing team をもち、整備

された HP はもちろん、100 万人を超える登録ユーザー、40 万人の newsletter 読者(毎月 13000 名増)、その他 e-mail, face book, flyer などの電子媒体により、世界中に効果的にその visibility を高める能力を有しています。

また BMC の電子投稿システムの活用により査読の効率化とともに著者の査読状況の把握も可能となり、論文受理とほぼ同時に配信されることで論文受付から掲載までの期間の大幅な短縮が期待されます。さらに投稿料は当分現状据え置きとし、電子化のため色刷りも料金に反映されません。

私たち編集委員一同は、これからもさらに高い質と高いインパクトファクターをもつ学術誌として発展できるよう努力して参ります。皆様からの多くの投稿をお待ちしています。

【国際会議のお知らせ】

Inter-Congress 2012 , ICPA2013 について

国際担当理事(恒次・原田)

昨年の ICPA2010 には多数のご参加をいただきありがとうございました。次回の ICPA は 2013 年に開催される予定です(ICPA2013)。2 年毎の開催から変則的に 3 年の間隔となることに伴い、インターコンGRESS が 2012 年に企画されています(Inter-Congress2012)。

Inter-Congress2012 および ICPA2013 は下記の要領にて開催される予定ですが、詳細が決まり次第、改めてお知らせいたします。

Inter-Congress 2012

日 時：2012 年 9 月 3 ～ 4 日

場 所：Capital Medical University, 北京, 中国

会議長：Professor Wei Wang

メインテーマ：Adapting to life in Asian
Mega-Cities

ICPA2013

HBA (Human Biology Association) が 2013 年 4 月 9 - 10 日, AAPA (American Association of Physical Anthropology) が 4 月 11 - 13 日に開催する大会の日程に合わせて ICPA を開催することとなり, 現在 HBA とのジョイントが検討されています.

日 時：2013 年 4 月 8 ～ 9 日

場 所：米国テネシー州, Knoxville 市内のホテル

主催者：検討中

【在外満喫】

二度目のアメリカ留学に挑戦！

青木朋子

熊本県立大学



2011 年 8 月末から 1 年間, 勤務している熊本県立大学の海外留学制度で, アメリカのニューヨーク州にあるロチェスター大学にきています. こちらに来てまだ 2 ヶ月あまりですので, 留学先のご紹介をするには十分ではないのですが, これを読んで少しでも多くの方に海外での研究について興味を持っていただければと思い, 書かせていただくことにしました.

ニューヨーク州といえば, イメージされるのは「ニューヨーク・シティ」だと思うのですが, ここはニューヨーク・シティからは車で 6, 7 時間かかるようで, 同じニューヨーク州と言ってもかなり雰囲気が異なります. 五大湖の一つであるオンタリオ湖の南岸に位置し, すぐそこはカナダという場所です. そのため, 冬は寒さが厳しく, 雪も多いようです. ロチェスターはニューヨーク州 3 番目の都市で, 人口は約 22 万人, 周辺地域も合わせると約 110 万人だそうです. 昔は, 「Flour city」という通称だったようで中心地を少し離れると小麦畑が広がっていますが, 現在は, 「Flower city」と呼ばれ, 街中に花が多く見られます. どこに行くにも車が必要なことは短期間留学をする上では不便ですが, 治安は比較的良く, 生活しやすい場所だと思います. ロチェスターは学研都市でもあり, ロチェスター大学やロチェスター工科大学等, 複数の大学のキャンパスがあります. イーストマン・コダック, ボシュロム, ゼロックス等の創業の地であることから, ロチェスター大学においても光学の分野が優れているようです. 日本では, ノーベル物理学賞を受賞された小柴昌俊先生が博士号を取得されたことで知られているかもしれません.

さて, 私は, 大学院生の頃から現在に至るまで, 手指の運動制御機構を探る研究を行っています. 特に, 修士・博士課程, そして, 現在, 所属している熊本県立大学では, 主に, タッピング課題を用いて, 指の運動機能とその背景にある要因を探る研究をしています. 博士号取得後に, アメリカのペンシルベニア州立大学で 1 年半, 博士研究員をしていたので, 私にとっては, 今回が二度目のアメリカ研究留学となります. 今回の留学では, ロチェスター大学の Marc H. Schieber 先生のラボに所属しています. Schieber 先生のラボでは, 主にサルを対象として, 1 本の指を動かそうとした場合にも他の指の運動も生じるという指の独立性を定量化する研究, そして, 筋電図や電気生理的手法を用いた指の独立運動を制限する要因を解明する研究等がこれまでに行われています. 私自身は, ヒトを対象に, 利き手・非利き手の指の運動能力を評価する方法の開発を目指して, 現在, 研究に取り組んでいます. ラボはメディカルセンター内にありますが, 私は Schieber 先生が兼任されている Department of Neurobiology and Anatomy に



所属しています。この学部には人類学を名称としているラボはないようですが、学部の内容から考えると、ある意味、所属するすべてのラボが生理人類学と関連していると言ってもいいのかもしれない。

一度目の留学では、何もかもが新鮮で、留学したからこそわかることがたくさんあると感じました。その一方で、英語で会話をしなくてはならないというものの、ラボの中で研究を実施するプロセスそのものは、日本とそれほど変わらないとも感じました。ただ、私は大学院時代、博士研究員時代、そして今回と、すべて、手指の運動制御をテーマとするラボに所属していますが、それぞれの先生によって、なぜ、手指の運動制御研究が興味深いのか、という視点が異なり、そうした異なる観点をもつ研究者の方々と一緒に研究できることは研究留学の大きな利点だと思います。一度目の留学で、英語や海外生活の大変さを経験したにも関わらず、今回、また留学したいと思ったのは、そうした異なる視点から研究に取り組むことによって、また新たなことを学びたいという気持ちが強かったからです。海外で生活し、海外の大学で研究をすることによって、日本にいたとしたら気付かなかった多くのことを、前回も今回も考えさせられており、留学の素晴らしさを改めて実感しています。今後は、幸運にもいただけた貴重な留学の機会をより実りあるものとし、これからの研究生活に活かしていけるように、精一杯頑張りたいと思っています。



【研究部会レポート】

姿勢研究部会

部会長 藤原勝夫
(金沢大学)

姿勢研究部会は、平成 20 年に設立されました。研究会は、第 1 回(平成 20 年 6 月 6 日)を大阪市立大学、第 2 回(平成 21 年 5 月 16 日)、第 3 回(平成 22 年 6 月 26 日)を金沢大学、第 4 回(平成 23 年 7 月 9 日)を札幌国際大学で開催いたしました。会員の方には、既に学会等で発表された内容でも、研究途中で整理されていない内容でもかまわないので、話題を提供していただくようお願いしております。その趣旨を理解していただき、毎回、15 ～ 20 題の話題が提供されています。いずれの研究会でも、提供される話題について十分な議論ができるように 1 つの話題について 20 分間の発表・質疑の時間を設定しました。それにもまして、発表当日は、時間を無視した長時間の白熱した議論が行われております。研究会の開催日・場所の設定には苦心しております。できれば、日本生理人類学会学術大会に合わせて設定したいと毎回模索しております。



これまでの研究会では、トピックスを設定したこともあります。その 1 つに、「姿勢保持機能の左右差」をあげ、話題提供者として人類学、バイオメカニクス、神経科学、筋生理学などの諸分野の先生方が出席しました。歩行運動のような左右の運動が対称的であると思われる運動においても、左右差のあることが報告されています。姿勢制御の左右差についての研究を進める過程では、感覚刺激によって歩行運動時の左右差を整えることが期待できるという知見が得られています。そのような感覚刺激を加えることができる製品の開

発という視点も生まれております。これらの論議を基に、姿勢研究部会関係者が中心となって、姿勢保持機能の左右差をテーマにした科学研究費（基盤研究 A ないし B）の申請を行っております。次回の第 5 回研究会（平成 24 年）では、「腰痛症」について論議したいと考えています。今のところ、金沢大学での開催になりそうです。

これまでに提供していただいた話題を分類してみると、二足歩行の起源、支持面移動時の姿勢制御、姿勢制御と脳機能、姿勢と関節機能、静的姿勢と動的姿勢における左右差、立位時の足底圧情報、歩行路と歩行の制御、歩行運動における動作解析・眼球制御、転倒予防、腰痛予防の器具および運動プログラムの開発、姿勢筋の強化と姿勢制御の改善、脳性麻痺者の姿勢制御、介護における姿勢、歩行補助具の開発の視点、めまい・姿勢動揺、姿勢計測法など多岐に渡っています。今後は、これらに加えて、姿勢制御に有効な製品の開発や医療を含めた広いテーマを取り上げていきたいと考えています。

今後、姿勢についての論議をさらに重ね、日本生理人類学会学術大会でシンポジウムを開催できるようにしたいとも考えております。姿勢に関わる学問分野は広く、それらの多くの人の参加を希望しております。

【書評】



「感性を科学する」
（佐藤方彦著、丸善出版）

勝浦哲夫(千葉大学)

感性とは何か？—生理人類学を研究しているものにとって頭を悩ませているこの難問に光明を与えてくれる名著である。著者の故郷である釧路湿原の道なき路「感性散策路」を案内する趣向で書かれている。案内人はこの深く険しい道を安全にやさしく案内してくれるので、読者は知らず知らずのうちこの散策路を踏破できる。さらに途中の

眺望もすばらしい。

本書は次のような 8 章からなっている。

- 第 1 章 ピカソの駄作？比べ
- 第 2 章 感性論の展開
- 第 3 章 感性の定番
- 第 4 章 感性の始まり？
- 第 5 章 ネアンデルタールの感性
- 第 6 章 感性の脳内基盤
- 第 7 章 感性と直観
- 第 8 章 感性と悟性・理性

「感性は総合科学的な問題であり、自然科学のアプローチだけでは不十分である。哲学や芸術あるいは人文科学の領域にまで踏み込むことが必要である」と書かれている。まさにその通り、本書で展開される論述で著者の芸術に対する造詣の深さに圧倒される。第 1 章「ピカソの駄作？比べ」で述べられているピカソの「アヴィニヨンの娘たち」「泣く女」「ヴァイオリンを持つ男」「マンドリンを弾く若い娘」、バティストルニョーの「ハズのトレース」、ミロのヴィーナス、歌麿の「寛政三美人」、ムンクの「思春期」等々の絵画に対する見解は一級の美術評論である。しかし、「本書の目的は美術評論ではなく」、これは感性に近付くための助走に過ぎないのである。

カントなどの哲学における感性の歴史的考察については第 2 章「感性論の展開」で詳しく述べられている。「感性」という言葉を作ったのは西周（にし あまね）か天野貞佑か、感性のアクセントが戦後変わったなどの興味深い話題にも触れている。「感性」と「感覚」の混用を指摘し、「感覚は、感性・感受性・直感とは異なるカテゴリーに属している生理現象なのである」ことを強調している。

第 3 章「感性の定番」の視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などの「感覚」と「脳」についての記述は生理人類学を研究するものにもなじみ深いものである。しかし、ここでも著者の造詣の深さに舌を巻くのは私だけではないだろう。モンキー・ピクチャー（サル絵）をめぐる話題は第 4 章「感性の始まり？」で述べられ、デズモンド・モリスの見解を脳生理学の観点から批判している。

生理人類学を含む人類学を研究するものにとって興味深いところは第 5 章「ネアンデルタールの感性」であろう。ネアンデルタールはホモ・サピエンスと同一の種であり、彼らは死者に花を手向け、障害者を介護する感性を持っていたという。

2010 年 5 月「サイエンス」で発表された最新のゲノム研究により「ネアンデルタールと現生人類の間には生殖の隔離のないこと、つまり、両者は同一種の中の亜種の関係であることを明確にしたものだった。生理人類学の視点からはまさに当然の研究結果である」。これについて私には赤面の思いがあるがここでは触れない。

第 6 章「感性の脳内基盤」、第 7 章「感性と直観」、第 8 章「感性と悟性・理性」がこの「感性散策路」の最も秀美なところである。まさに「感性」とは何か、脳の構造、回路、そしてさまざまな仮説を引用し、明確に述べられている。ここから先についてはへたな要約はしない方がよい。一気に読めるし、また、何回でも読みたくなる。

生理人類学会会員はもちろん、ヒトに関する研究をしているあらゆる方に是非、読んで戴きたい著書である。眼から鱗が何枚も落ちること必至である。

from Editors

次回 No.1 の原稿締切は 2012 年 1 月 5 日です

▽今号のトップ記事(学会誌編集委員会便り)にありますように、来年から紙媒体の英文誌はなくなり、電子データのみとなります。PANews は

これまで英文誌に綴じ込んでデリバリされてきましたが、“相乗り”するメディアがなくなってしまうのです。

▽ 9 月の第 3 回理事会において、来年以後の PANews の処遇が審議されました。和文誌に綴じ込んで年 4 回発行する、メールマガジン化するなどの提案がありましたが、年 6 回の発行を維持し、会員のみなさまのお手元に発送することになりました。学会と会員をつなぐ会報としてこれまで通りの機能を維持して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

▽関係学会の研究動向、留学先の様子、生理人類学関連書籍の書評などなど、みなさまからの投稿をお待ちしております。約 900 字で半ページとなります。ビジュアルに訴えるカラーの図版や写真も大歓迎です。紙版はモノクロ掲載ですが、学会ホームページで公開される PDF 版ではカラーのまま掲載されます。なお、記事の掲載可否は PANews 編集事務局で決定いたしますので、あらかじめご了承ください。

▽ PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター
仲村 匡司 京都大学大学院 農学研究科

メールアドレス panews@jspa.net

※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。